



紹介者

坂下 智保

富士ソフト
取締役社長執行役員



嶋本 正

野村総合研究所
取締役

非力だったデータ

3月1日の東京マラソンで大迫傑選手は自らが持つ日本記録を更新して、見事にゴールした。一時は井上大仁選手を含むトップ集団から後れを取り、ハラハラさせられたものの、自身の体と的確に調和を図りながら走り続け、東京オリンピックの出場枠を獲得した。世界のレベルにも近づきつつあり、これからの活躍が楽しみである。

彼らエリートランナーとは次元が違うが、私自身、15年ほど前、50歳を過ぎたころから健康や体調管理のために走ることを始め、今では市民ランナーの端くれとなった。毎年ハーフマラソンやフルマラソンに参加するようにもしている。昨今、大迫選手が所属するナイキの厚底ランニングシューズの効用が話題になっているが、私のランニング人生においてもシューズにかかわるエピソードがあるのでご紹介したい。

還暦を迎えた際、その祝いにと、長女から、オーダーメイドのランニングシューズを注文できるギフト券をもらった。早速、銀座にあるスポーツシューズ店に意気込んで駆け付けたものの、想定外のことが起こった。まず、足のサイズを立体的に測定するのだが、26.5cmのシューズを履き続けていた自らの足のサイズが、右が26.2cm、左が26.6cmであることが判明した。靴が時々窮屈だなと感じたときは幅広の靴を履いていたのだが、店員からは、27cmでスリムな靴を薦められた。その上で、いよいよシューズのオーダーである。店員から、走るスピードを聞かれて、少しさばを読み、「1km、5分ちょっとかな」と説明した途端に、「いや、そのスピードだと、オーダーにするとかえって足を痛めますよ。足に優しい初心者用のシューズがよろしい」ということで、結局、普段使用しているのとあまり変わらないシューズを買うことになった。ただ、適切なサイズの靴ではあったが。

その後、足を痛めることもなく安定的に走ることができており、オーダーメイドシューズを諦めたことを後悔してはいない。ただ、データを駆使してピッタリのサイズの靴が作れても、それを履くにふさわしい実力が伴わないと宝の持ち腐れになることに妙に納得感を抱いている。それは、今後のデジタル化時代のデータ至上主義への警告かもしれない。

▶▶ 次回リレートーク

吉川 淳

野村不動産ホールディングス
取締役会長